

幼児期から児童期への教育

幼児教育係長 梅田 真寿美

Umeda Masumi

要 旨

幼児期と児童期の教育の間には、教育方法等の違いがあるものの、発達と学びの連続性は存在しているはずである。しかし、様々な環境の変化に伴い、子どもがその違いを乗り越えられなくなってきた。ここでは、幼児期と児童期に行われる教育について考察し、連携の在り方を探った。

キーワード： 幼児期、児童期、幼小連携

1 はじめに

人間形成の基礎が培われる幼児期の教育の重要性を鑑み、今年度、教育研究所に幼児教育部が新設された。更に、奈良県幼児教育懇談会を設置し、平成19年3月に奈良県幼児教育推進指針を策定するための協議を行ってきた。この協議の中で、幼児期の教育を充実させるためのポイントの一つに挙げられているのが、幼児期から児童期への滑らかな接続という点である。

また、昨年、改正された教育基本法に新しく「幼児期の教育」の条文が設けられたり、幼児教育振興アクションプログラムにおける施策の柱の一つに「発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」が挙げられたりするという大きな動きがあった。日本の教育の体系を幼児期からとらえ、取組を進める時期が来ているということができよう。そんな中、国で行われている幼稚園教育要領の改訂に向けた審議の柱に「幼稚園教育と小学校教育の連携推進等」が挙げられ、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼稚園教育専門部会で様々な議論が行われている。平成19年度中には新しい幼稚園教育要領として内容が示されることになる。

幼児期に行われる教育の場で、子どもは指導者や友達と共に活動し、多くの学びを経験する。その学びは、つながり合い互いに関連をもちながら、教科等の学習を中心とする小学校以降の教育の基盤を形成することとなる。本稿では、幼児期と児童期の教育について考察するとともに幼児期から児童期への滑らかな接続に向けた実践について提案を行っていく。

2 研究目的

幼児期の教育と児童期の教育との違いを明らかにし、子どもがその違いをスムーズに乗り越えていくために必要な手立てについて考察する。

3 研究内容

平成4年度、小学校において第1、2学年に生活科が本格導入された。続いて平成14年度からは第3学年以上に総合的な学習の時間が導入された。各小学校においては第1学年から第6学年までの系統性をどのように考えていくか、ということは随分論議されてきた。しかし、入学前の教育につい

ての論議はほとんどなかった。また、入学までの子どもがどのような教育を受け、どれだけ成長してきているととらえていただろうか。「小学校に入学してきた子どもは、白紙でゼロからの出発だ。」などという声はなかったであろうか。少なくとも、長年小学校教員をしてきた筆者にとって、幼児教育の成果を受けて小学校教育が始まることの重要性を十分に認識し取り組んでいた、と言い切ることは難しい。

反対に、幼稚園や保育所の指導者からは、「あの子どもたちはもっといろんなことができるのに。」と入学した子どもたちの様子を話しているということや、小学校との交流は行っているものの一緒に過ごす時間があるだけで終わってしまっているなどということをよく聞く。小学校学習指導要領について研修し、小学校において子どもたちがどのような指導形態でどのような指導体制でどのような学びをしているのかなど、卒園後の子どもたちの学びの道筋について、関心をもって研修内容の中に組み込まれていたのだろうか。

このようなことから考えると、幼稚園や保育所と小学校との交流の機会が設けられることは多くなってきたものの、その意義についての位置付けはまだ充分でない現状にあるといえよう。

そこで、まず、幼児期と児童期に行われている教育における指導計画等について主な点をまとめ、次に、幼小連携に向けた取組について述べることにする。

(1) 幼児期と児童期に行われる教育の指導計画等

ア 幼児期における教育

幼児期における保育・教育は、その多くを幼稚園・保育所において行っている。幼稚園における教育内容は、幼稚園教育要領により「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域で示されていることは周知のとおりである。また、保育所においても、3歳から6歳の保育内容について、幼稚園の領域と整合性が図られている。そこで、ここでは幼稚園教育要領で示された内容をもとに、幼児期における教育を考えていくことにする。

幼稚園や保育所では各園(所)においてカリキュラムを設定し、それに基づいて教育が行われている。ここでの教育は、環境を通して行われる教育である。子どもは、主体的な活動を促す豊かな環境の中で、その子どもなりのやり方やテンポで繰り返し周囲にはたらきかけたり、はたらきかける過程自体を楽しんだりすることを通して友達や指導者とかかわっていく。このような幼児期の子どもたちの生活のほとんどは、遊びによって占められている。遊びには、成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている。指導者の目は一人一人の子どもに寄り添いながら、子どもが今何を目指して遊び、友達とどのようにかかわりながら何を学びとして身に付けることができているか、ということ进行分析し考察する。評価は子どもたち一人一人に応じた個人内評価であり、その視点を複合的なものとするためにも、指導者は他の指導者との一人の子どもに関する観察や情報を頻繁に提供し合う。

指導計画は、幼稚園教育要領で示されているように、長期の指導計画(年、学期、月あるいは発達の時期を単位としたもの)と短期の指導計画(週あるいは1日を単位としたもの)をもち、これらは様式も含めて各園(所)で決定・作成される。特に、日案においてはねらいや内容、環境の構成や援助などについて子どもの姿に直結した1日の流れが示される。1日の生活は、「自ら選んでする活動」と「学級全体活動」の時間で構成される場合が多い。

自ら選んでする活動の時間には、異年齢交流も行いやすく、一人一人の子どもが自分の思いを生かし、友達とかかわりながら遊びに向かう。指導者は、子どもと多様なかかわりを持ちながら全体を把握し、環境の構成や一人一人に応じた援助を行う。このような場では、どの学年の子どもにも

指導者がかかわるティーム保育が大切であるといわれている。学級全体活動の時間には、担任が自分のクラスの子どもの興味・関心を生かした活動を展開し、一人一人が生かされる援助を行いながら、子ども同士の心のつながりのある集団づくりを行う。その形態は、いすは出さずに床に座るとき、いすに座るとき、机を出してそのまわりに座るとき、立っているときなど、行う活動により様々である。

イ 児童期における教育

教育内容は、平成10年12月に文部省告示として出された小学校学習指導要領により示されている。なかでも、児童期における教育の大半を占める教科の学習においては、各校で学習指導要領の目標と内容に合わせて作成された教科書を主たる教材として、各学年各教科ごとに年間指導計画をもっている。これを見れば、何月にどの単元を何時間で学習するか、目標や単元の評価規準はどのようなものであるか、ということが分かるようになっている。

各クラス担任は、各教科における単元の指導計画を時間割と照らし合わせながら、1か月ごと、1週間ごとの指導計画をもち、指導に当たることとなる。学習指導要領の内容により目標が定められ、目標から作成された観点別の単元の評価規準により絶対評価による評価が行われる。端的に言えば、児童期の学びは教科書をとおした学びということもできよう。だが、指導者は、学習内容を一方向に教え込むことばかりを行っているのではなく、一人一人の子どものもつ興味・関心を生かして学習への意欲を高めることにより、子どもたちが自ら課題を解決し、分かったという充実感をえられる指導を目指している。指導者のもつ力量の間われるところでもある。

幼児期と児童期の教育の間には発達と学びの連続性は成り立っているはずである。しかし、児童期の教育において、45分を1単位時間として学習を行うこと、黒板を前にして自分の机・いすに座って行う学習形態が多いこと、クラス全体への指示がまず行われる指導方法が多いこと、提示された限られた環境の中から自分の課題を見いだすことが求められる学習展開が多いこと、自分の考えを様々な方法で表現しながら友達とかかわり合って学習が進む場が多いことなどに対して、現実には子どもが適応できずにいることも少なくない。

学習や生活の環境、人とのかかわり、体験や学びの質、コミュニケーションの方法、生活時間の流れの仕組み、集団の大きさなどに対する校種間の違いが子どもにとって刺激となり学習の意欲となることができるようになるためにも、幼児期の教育の成果を児童期に生かす取組を進めていかねばならない。

(2) 幼小連携に向けた取組

幼児期の教育の成果を児童期に生かすためには、一貫性のある軸に沿って考えていく必要がある。その軸に沿いながら、幼児期の育ちを児童期で受けついでいくのである。

無藤氏^{*1}は、その軸を次のように述べている。

○ 協同的な学び、学習の芽生え、自己と社会性の育ち

また、秋田氏^{*2}も、次のように述べている。

○ 他者と協働し合って新たなものを創りだしていく力、学習の芽生え、集団の中で一員としての自覚や友達との関係の中で自己を形成すること

そこで、これらを参考としながら、(ア)園生活と協同的な学び、(イ)学習の芽生え、(ウ)友達との関係の中での自己の形成、の三つを幼小連携の軸とした一考察を次に述べる。

ア 幼小連携の軸

(ア) 園(所)生活と協同的な学び

園(所)における子どもの協同的な学びに向かう姿は、単に活動を一緒にすることからは実現しない。子ども同士の共感性を育て、心が響き合う学級集団をつくることからみられるようになる。また、5歳児で一気に協同性の育ちがみられるわけではないことから、3、4歳の教育課程においてどの年齢でどう育つことを願っているのか、園(所)として明確にもちながら取り組むことが大切である。3、4歳からの遊びにおいて、子どもが指導者とつくり出す豊かな環境と適切な援助のもとで、身体全部を使いながら達成感、充実感、挫折感、葛藤などを味わい、精神的にも成長することで、このような共感性は育ってくる。

5歳児では、協同的な活動を行う機会は、すでに園(所)の保育の中にある。運動会や発表会などの行事のように予め園(所)の生活の中に組み込まれていることをきっかけとして、学級集団としての協同性をまず高めることができる。更に、子どもの内面を育てておくことで、偶発的な出来事や子どもが環境にかかわって生まれてくる遊びから一人では得られない何かに集中していく気分を感じたり、他の子どもと相談したり工夫したりしながら、自分も他者も生き生きするような協同性が高まることもある。

これらが、単に協同的な活動の場としてのみで終わってしまうことなく、協同的な学びとして結実できることが大切である。そのためには、次のようなことが必要と考える。

まず、子どもたちと指導者が一緒になって、一人一人の考えや疑問、思いなどを充分に出し合いながら話し合いを進め、納得して一つの目的に向かえる学級集団の育ちがあるかということ。これは、子どもに寄り添って一人一人の思いを大切にしながら学級全体で共有し、結果として子どもたちの社会性や情緒的な発達を促すことができ、幼稚園や保育所の指導者の得意とするところであろう。

次に、目的やこの一連の活動がどのような学びにつながっていくか、指導者の中で検討され議論されたものであるということ。その上で、指導者の援助により、一つの目標に向かって探求したり課題を解決したりするプロジェクト学習の指導方法をとることも価値がある。これは、小学校の生活科や総合的な学習の時間だけでなく教科の学習においても取り入れられている指導方法であり、5歳児後半、接続期の協同的な学びを考える際にも有効と考える。小学校においては、この子どもたちの協同的な学びの経験を学習活動の中で更に伸ばしていくことが求められる。

(イ) 学習の芽生え

幼児期における「学習の芽生え」を考えると、小学校以降で行われる教科学習と同じ内容を同じ様式で学ぶことを目指しているのではない。子ども自らがものや事の動きや変化を諸感覚を使って受け止めることから発見したり気付いたりするおもしろさが生まれる。そのことにより、そのものや事にかかわり続けながら心や体が動き始める。確かめようとしたり対象の動きに応じようとして更にかかわり合ったりする過程の中に学びが生まれる。この学びは、各教科の中核となる経験であり、心や体の動きは学習に向かう関心・意欲・態度となって小学校以降の学習に引き継がれていく。

テントウムシを見つけた子どもがいたとする。すぐに本で詳しい名前や体のつくりを調べたり分かったことを記録したりする活動へと援助するのではなく、見つけた場所を友達と一緒に見に行き、どのような場所でたくさん見付かるか、手の上のにせるとどのような動きをするか何度も何度も繰り返してみながら子どもがテントウムシに心を寄せる活動へと援助していきたい。これらは、知的好奇心という学習の芽生えの経験であり、第3学年で学習する理科の原点となる体験ともなる。

(ウ) 友達との関係の中での自己の形成

安定して過ごすことができるようになった幼稚園や保育所における生活や遊びの中で、子どもは自己発揮する経験を積み重ねる。仲間や集団を意識する活動の中で葛藤や調整する機会を経験し、自己抑制や相手を理解することなどを身に付けていく。大人にほめられるために行動する子どもや相手の言うとおりにになってしまう子どもの姿とは異なり、人とかかわりながら自ら考えて判断し行動する経験を積み重ねていく子どもの姿である。このように、様々な事象へ友達とともにかかわるかかわり方を身に付けた子どもは、小学校においても、力を発揮することができる。

幼児期において小学校教育を見据えた指導を行うこととともに、幼児期の教育の成果をいかに小学校教育に生かすか、ここに述べた3つの軸を基としながら考えていくことが必要といえよう。幼稚園や保育所から小学校へと入学する子どもたちのもつ期待や希望がうまく生かされる連携教育の在り方を、指導者が新たに創造していくことは急務と考える。

イ 幼小連携の視点

次に、国が示している幼小連携の視点を参考としながら、子ども同士の交流、指導者の相互理解、接続期のカリキュラムの連携の視点から幼小連携を考える。

(ア) 子ども同士の交流

子どもは、友達や様々な人とのかかわりを通して学びを広げたり深めたりしていく。同じクラスや同じ年齢の子ども同士ではもちろんだが、そこでは得られない学びの姿が異年齢とのかかわりの場ではみられる。子どもが年下の子どもとかかわるときには、自分が気付いていることや伝えたいことを相手に分かってもらうために新たな表現方法を用いたり伝えるタイミングを待ったりするなど、更なる学びへと向かう姿が期待できるだろう。また、子どもが年上の子どもとかかわるときには、その活動に刺激を受け、自分なりに同じような活動を目指したりかかわりを広げようとしたりする姿が期待できると考える。

現在、県内の幼稚園や保育所と小学校において、多くの交流が行われている。1、2年生が生活科の学習の一環として幼稚園や保育所の友達を招待する例、町探検で幼稚園を訪問する例などがある。1回だけでなく複数回実施している所も増えてきているようだ。しかし、ただ交流の場があるだけであったり、招待されてお客さまとして行っているだけだったりという状況が多いように思う。そこで終わってはいは交流の意義がなくなってしまう。交流を実施する際に、幼稚園や保育所の子どもたちにとって、小学生が学習に向かう姿も環境の一つとなり、自分たちの遊びがより豊かに広がり深まるものでありたい。また、小学生にとっても、年下の子どもたちとの活動を通して自分が身に付けた力を発揮したり、新たに気付いたりできる格好の学習の場であり、成長する自分を意識できる場としたい。言い換えれば、更なる学びへと向かう時であると考え。

子どもの交流の場を互いに意義のある場とするために、次の4点を挙げる。

まず一点目に、交流の計画を幼稚園や保育所、小学校の指導者が一緒に立案する、ということである。例を挙げてみる。小学校の子どもが幼稚園や保育所の子どもと交流をもつときに、指導者は、単元の中で活動がどのように展開するかを予想し、児童が「幼稚園の友達に来てもらいたい」「保育所に行って一緒に〇〇をしたい」のように思いの高揚と交流の日が重なるようにする。このとき、幼稚園や保育所の子どもにとっても、交流の場を迎えるまでにどのような思いをもっておけばそこで学びがより豊かになるか、幼稚園や保育所の指導者はイメージをもって取り組んでいることが大切である。そのためには、交流にかかわる指導者が合同で活動の計画や目標、それぞれの子どもへの援助や支援について話し合うことが必要になってくる。このような話し合い

の場をもつことで、互いの行っている教育内容について話し合いながら、指導者間の互いの思いや動きを共有し、共同で交流計画を立案することができる。まだまだ県内でも、小学校で交流を行うときには小学校の指導方法で、幼稚園や保育所で行うときには幼稚園や保育所の指導方法で行うことが多いという現状に変化が起こってくるのが期待できる。

二点目に、交流が終わった後にも指導者間の話し合いをもつ、ということである。互いの子どもたちの学びはどうであったか、計画とのずれがどこにあったか、そのずれをどのようにとらえていくか等々、そこには共有した目的に向かう指導者としての様々な見方が出てくるはずである。その記録を残して、次の交流や次年度の同時期の交流に生かしていくことが大切である。また、小学校の指導者が予想していた幼稚園や保育所の子どもたちの活動と実際のものとの違いや、幼稚園や保育所の指導者が予想していた小学校の子どもたちの活動と実際のものとの違いについて話し合っていくことで、互いの教育方法や教育内容についての理解を深めることにもつながると考える。

三点目に、交流の場に向かうことを意識した交流前の保育・教育と、交流での経験を生かした交流後の保育・教育を展開する、ということである。学級全体活動の場で話す、製作をする、絵を描く、お話にするなど、展開は様々な考えられる。幼稚園や保育所において、年上の小学生をモデルとすることから見られる遊びの広がりの中での学びについて様々な事例が検討されるようになることを期待したい。

四点目に、交流の機会を互いの教育課程に位置付ける、ということである。交流の該当学年の担任が変わることで取組が変わってしまうという現実には確かにある。しかし、まず位置付けることから、小学校と幼稚園・保育所の本当の付き合いが始まると考える。

(イ) 指導者の相互理解

指導観や指導体制の違い、援助に向けた姿勢の違い、環境や遊び等の用語のもつイメージの違い等々、校種の違いによる見方や考え方の溝を埋めるのは簡単ではない。それを埋める指導者の相互理解が必要である。また、幼小連携の軸に沿った情報交換も密に行いたい。

例えば、子ども同士の交流のための打合せは、大きな相互理解の場にもなる。県内の現状を見たとき、互いの保育や授業の参観はよく行われている。ただ、この参観においては、その指導についての話し合いを伴ったものとしたい。特に、小学校から幼稚園や保育所の保育を参観する際に、指導者の細やかな配慮や援助の意図はなかなか見えてこない。説明を聞くことで、保育の目指しているところが理解できるようになる。更に、子どもについての情報交換も大切である。この情報交換は、入学前に入学予定の子どもについて行われていることが多いが、これも何度か定期的に行うことで、小学校において十分な受け入れのための準備をすることができる。

これらの相互理解に向けた研修は、該当となる学年の指導者が中心に進めてしまい、全員の指導者が参加できるものでないことが多い。その場合、全体の職員に伝えられる場を設けることが大切である。全職員が幼児期から児童期への子どもの育ちをつなぐこと、学びをつなぐことの重要性を理解する風土をつくっていくことが幼小連携の土台となる。

(ロ) 接続期のカリキュラムの連携

接続期のカリキュラムの連携を進める必要性が、様々な場所で言われるようになってきた。しかし、先に述べた幼児期と児童期に行われる教育の違いについて指導者の研修がまだ充分でないこと、交流の場があれば連携していることになるという認識がまだあること、接続期のカリキュラムとはどのようなもので、どのように連携をすればよいのか明らかになっていないことなど、課題は山積しており、進めにくい状況である。

現在、幼稚園教育要領の改訂に向け、幼稚園や保育所と小学校の接続期のカリキュラムの在り方についても検討が進んでいる。中央教育審議会における幼稚園教育専門部会での議論等を参考としながら、これらの課題に対して現時点で述べることのできる考え方や視点等について次に述べる。

○ 接続期としてとらえる時期

接続期としてとらえる時期は、幼稚園や保育所において子どもたちを何年保育して、どのような環境にあるかにより多少の時期の変更は必要だが、5歳児後半を考えていくのが適当であろう。子どもがかかわる人との関係や周囲の環境が大きく変化することに伴う戸惑い・不安・期待などを指導者がていねいに受け止めながら、指導者や友達とのかかわりを基盤に主体的に学ぶ姿勢をはぐくむためにも、発達の過程を見極めて接続期をとらえることが大切である。

また、小学校においても、時間割のない生活から急に時間割で区切られた生活をするこゝに對する子どもの違和感の大きさを考えたとき、第1学年の4・5月から1学期の間を接続期としてとらえ、取り組むことが大切であろう。

○ 接続期のカリキュラムにおいて（幼児期）

接続期と考える時期までには、協同的な学びにより高まり合える学級集団として育てていることを期待したい。そこでは、友達と一緒にあって少し先の目標を目指して目標達成のために工夫したり努力したりするプロジェクト学習による活動を経験したい。（プロジェクト学習については、後で述べる。）このような学習法による協同的な学びは、小学校における授業の学習活動に発展していくものとなる。

また、学習の芽生えがどのような経験として子どもたちの中にあるか、偏りはないかなどを振り返っていくことが、特に接続期には大切である。そのためには、学習の芽生えといえる学びが、どのように保育の中に位置付いているか、園(所)でもっておくことも必要だと考える。

更に、友達との関係の中での自己の形成という軸から子どもを見たときに、感情表現がうまくできなかつたりいつまでも周りに依存する傾向が高かつたりするなど、自己発揮することが難しい子どもに心を配りたい。このような子どもに対して、接続期には、自信をもち安心して活躍できる場を与えて自己有能感を高めていくことが必要である。

○ 接続期のカリキュラムにおいて（児童期）

入学当初の1年生の教室。友達と話している子ども、いすに座ってじっとしている子ども、うろうろと歩き回っている子ども、声をかけても座れない子ども、友達とけんかをしている子ども……。幼児期には自分がすぐに遊べる環境が周りにあり、遊びに没頭しているところへ友達や指導者の声が聞こえてくる。そんな刺激を受けながら自分で考えて活動をしていた子どもが、限られた環境である教室において、意欲的に学校生活を送れるようになるためにはどのようなことを考えていけばよいだろうか。

学習の芽生えといえるどのような学びを幼児期に経験しているか知っていることにより、幼児期の学びを生かした児童期の学びの在り方を実践につなぐことができやすくなる。例えば、第1学年の算数で教えようとしている数について。幼児期に、子どもたちはすごろく遊びをするためにさいころを振り、出た目の数だけ数を数えながら駒を進めて遊ぶ経験をしている。その状況なりそこでの子どもの学びについて小学校の指導者が知っていれば、算数の目標とする知識や思考へと導く方法をより明確に考えることができるであろう。他教科についても同様のことがたくさんある。

また、子どもたちにとって大きな環境の変化となっている時間割で区切られた学校生活の流れについても、幼児期の学級集団において、子どもたちは協同的な学びにおける高まりをどのように実現していたか知ることで、その力を生かしながら小学校の生活の流れをどのように受け止めることができるか予想できる。3、4歳児の遊びの中での興味や関心に沿った活動から5歳児の興味や関心を生かした学び、教科等を中心とした学習へと幼児期から児童期への教育はつながっていく。このことを考え、第1学年の4、5月のみでも2時間目終了までのチャームをなくし、生活科を中心としたプロジェクト学習を進めたり、合科を意識した活動や教科の関連性を考えた学習内容の展開を図ったりすることも一つの取組である。子どもは、幼児期に付けた力を効果的に使いながら児童期の学びを深める姿を見せてくれるであろう。

○ プロジェクト学習について

小学校以降の学習活動において、特に生活科や総合的な学習の時間に行われていることが多いのがプロジェクト学習である。子どもたちが意欲的に自分でテーマをもち、時間的には少し離れたところにあるテーマというゴールに向かう。このテーマは、子どもたち自らが問題意識

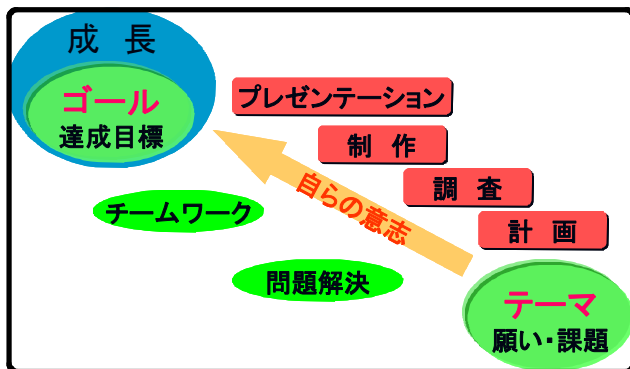


図1 プロジェクト学習イメージ図(児童期以降)

をもって見いだしたものである。

問題を解決してゴールに向かうために、「何のために、何をやりたいのか」という意識を子どもたち自身が自覚して、計画を立て、調査を行い、調査結果について友達と協力してまとめ、それを様々な方法でプレゼンテーションをして伝えていく、というものである。そのプロセスを子ども自らが意識して実行し、問題解決を成し遂げることができた達成感や成就感からは、自らの成長を感じ取ったり、自信を付けたりすることができる。

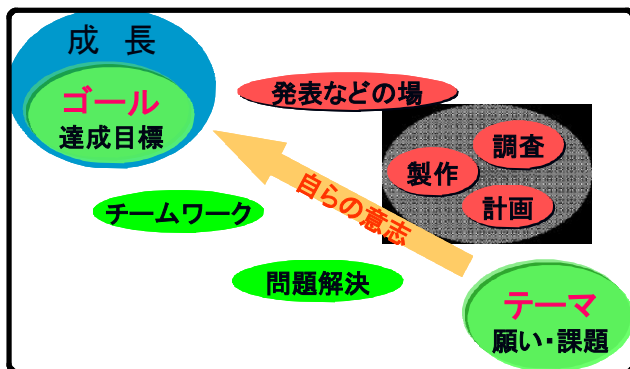


図2 プロジェクト学習イメージ図(幼児期)

5歳後半の接続期の経験を考えるとどうだろうか。子ども同士が指導者の援助のもとで、共通の目的や挑戦的な課題など、一つのテーマを創り出し、友達同士で協力したり工夫したりしながら繰り返しチャレンジして解決していく活動がそうである。

例えば、劇遊びでクラスみんなが大好きな「ピーターパン」をやろう、ということに決まったとする。協同的な学びへの高まりがある学級集団においては、子どもたちから「ここでの海賊フック隊長の声はこんな声がいいよ」「こんな船にしたらどうかな」「ここにこれくらい大きさの大砲があったらいいと思うから〇〇ちゃんと作ってもいい？」などと劇を創り上げていくためのアイデアが次々と出てくる。指導者は、その日の活動場面を設定したり子どもたちが相談し合える場を設定したりしてせりふや動きをまとめていく。このようにして学級全員で創り上げていった高まりの中で発表会を終えた子どもたちは、大きな達成感と自信をもつことができる。

幼児期におけるプロジェクト学習については、接続期のカリキュラムの作成に向けた議論等と合わせて、その在り方についての検討をこれから重ねていきたいと考える。

4 今後の課題

平成19年度中には、改訂された小学校学習指導要領や幼稚園教育要領も示されるであろう。それらの中では、現行のものより更に踏み込んだ幼児教育と小学校教育の連携がそれぞれに求められると考える。

本稿では、幼児期から児童期への教育について考察し、現段階での国の状況等を踏まえながら実践に向けた提案を行ってきた。しかし、肝心なのは、いかにその実践を行っていくか、ということである。地域、学校、幼稚園や保育所、子ども、それぞれの実態に応じてカリキュラムの具体はどのようなものが考えられるか、実践に向けて指導者の配慮は具体的にどうすればよいのかなど、具体モデルがあることで、それぞれの取組は更に行いやすい状況となる。この具体モデルについて、検討を進めたい。

また、ここでは触れることができなかったが、幼小連携の視点として、家庭への啓発や家庭との連携について外すことはできない。幼小連携を見据えた家庭とのかかわりについても考えを進めたい。

これらの点を課題とし、更に研究を推し進めていきたいと考える。

5 おわりに

国における動向を踏まえながら本稿での考察を進めてきた。それぞれの幼稚園や保育所、小学校において、社会全体の流れを受け止めた上で、目の前にいる保護者や子どもたちがどのような実態に合った手だてを形にしていくときがきているといえよう。

幼児期の教育のもつよさ、児童期の教育のもつよさを指導者が互いに学び合うことにより、子どもがその育ちの過程において常に学ぶ喜びをもちながら成長していく姿を目指し、取組を推進していきたいと考える。

引用・参考文献

- ※1 無藤隆 初等教育資料 No. 805 「就学前教育と小学校教育との連携」 文部科学省 東洋館 平18
- ※2 秋田喜代美 幼稚園じほう「接続期の遊びと学び」 全国国公立幼稚園長会 平17
- (1) 幼稚園教育要領解説 文部科学省 フレーベル館 平11
- (2) 幼児期から児童期への教育 国立教育政策研究所教育課程研究センター ひかりのくに 平17
- (3) 初等教育資料 No. 805 文部科学省 平18
- (4) 幼稚園じほう 全国国公立幼稚園長会 平18
- (5) なめらかな幼小の連携教育 佐々木宏子 チャイルド社 2004